

果実と大地

——ネボ山司祭ヨアンニス礼拝堂 上部床モザイクの考察——

日比生 優 佳

Fruits and the Earth: The Upper Mosaic Pavement of the Chapel of the Priest John at Mount Nebo

Yuka HIBIO

Abstract

The upper pavement of the Chapel of the Priest John at Mount Nebo dates back to the second half of the sixth century. The floor is decorated with a wide meandering border, containing square panels depicting birds, and portraits of a woman and an old man. These two people are considered to be the benefactors of this chapel. The central area of the pavement is divided into two sections. In the eastern part, an temple-like architecture is flanked by pairs of birds and plants. One of the two dedicatory inscriptions of the chapel, which is set between the columns of this building, contains the names of the benefactors. The larger area of the remaining part of the floor is occupied by scroll motifs of acanthus leaves that include figures and animals.

The study focuses on the Earth and the motives of fruits represented in this inhabited scroll. The Earth, which is personified as a woman, is closely related to fruits. In some mosaic pavements, the Earth is associated with the four Seasons. The Seasons also appear with Annus (Year), Ananeosis (Renewal), and Christ. Both of these themes and Seasons have been considered to be symbols of eternity or renewal.

Through the examination of these themes, this work intends to interpret the meaning of the Earth and the fruits. In the progression of the four seasons, seed-containing fruits fall on the ground, sprout, and the bear fruits after the plants grow fully. With this cyclic movement, as with the other themes related to seasons, the earth and fruits could refer to eternity or renewal besides abundance.

はじめに

ヨルダンにおける床モザイクの発掘は、古代都市の遺構が偶然に発見されたのを契機とし、1880年に始まった。発掘が行われた地域の中でも、「マダバ・マップ」として名高い地図のモザイクがあるマダバと並び、多くの作例を有するネボ山はよく知られている。ネボ山は旧約聖書、申命記(34:1)において、モーセが登ったと伝えられる山である。5世紀頃の聖地巡礼の旅を記した『エゲリア巡礼記』では、この山に登りたいと熱望した修道女が険しい山道を進み、山上の聖堂にたどり着く様子が語られる⁽¹⁾。同様に5世紀に書かれたとされる『イベリア

のペトルスの生涯』では、ネボ山の洞窟でモーセの幻影を見た羊飼いが、預言者の現れた場所に石を積んで目印とし、村人と共にその場に記念堂を建てたエピソードが紹介されている⁽²⁾。アンマンの南西30kmほどの場所に位置するキルベット・アル・ムクハヤット(Khirbet al-Mukhayyat)がネボと同定され、1913年に聖ロト・聖プロコピオスの聖堂(6世紀後半)のモザイクが発見された後に調査は本格化し、宗教的な建造物に属していた床モザイクが複数確認された。

ネボ山のモザイクの中でも、司祭ヨアンニス礼拝堂の上部床は比較的保存状態が良いとされる。この礼拝堂はアモスとカンセウスの聖堂北側に付属する

(図1)。身廊の床モザイクは上下2層から成っており、下部床は5世紀末から6世紀初頭に、上部床は6世紀後半に作られたと考えられる(図2)。調査は1933年に開始され、銘文に記された司祭ヨアンニスから礼拝堂の呼称がとられた。1973年の再調査ではモザイクの状態の悪化が確認され、1985年には保護を目的とし、床モザイクを剥離する決定がなされた。80cmほど下にある別の床が見つかったのは、上部床の剥離を行った時である⁽³⁾。

ヨルダンで発見されたモザイクの年代は、紀元前1世紀から紀元後8世紀に及ぶ。当時の歴史的・芸術的な在り様を示している点で、これら作例は貴重といえる。他の地域の床モザイクと同様、神話の場面や都市の景観、ナイル河とその流域の風物、狩りや農耕の風景、葡萄などの蔓草が作る渦の中に様々なモチーフを配したインハビテッド・スクロールに代表される古典的な主題が採用され、四季や大地、海、河などを人の姿で示した擬人像も見られる。主流となる宗教は異教からキリスト教へと転じてゆくが、異教時代のモチーフは聖堂の装飾にも引き継ぎ用いられている。

ヨルダンの作例の多くは銘文を伴い、それによって制作の年代や寄進者の名などの情報が伝えられてきた。ネボ山では100人以上が銘文に名を残している。司祭ヨアンニス礼拝堂の上部モザイクには、男女双方の名を含む銘文に加え、寄進者の肖像と目される胸像が2点配されている⁽⁴⁾。またこの床に表された、アカンサスの葉がモチーフを内包するインハビテッド・スクロールは、研究者により様々な解釈がなされてきた。本稿はこの部分に関し、重要な要素と考えられる「大地」およびこれと関連の深いモチーフである果実に着目し、考察を行うものである。

以下、司祭ヨアンニス礼拝堂の上部モザイクの概要並びに本稿における考察の手順を示す。

1. 司祭ヨアンニス礼拝堂 上部モザイクの概要

この礼拝堂の上部床は、メアンダー文を用いた幅広い帯で囲まれている。この装飾帯に組み込まれた方形のパネルには様々な鳥が表され、また人物の胸像も2点確認できる。装飾帯の東側、中央のパネルにはニンプスのある女性(図3)が配され、北側の中央には年配の男性(図4)が表されている。帯の

内側、最も東の部分には、3行にわたる銘文がある。その内容は次のとおりである。

銘文1:

実に敬虔にして、神に愛された主教ヨアンニスの時代、この聖なる場所は司祭ヨアンニスの熱意により再建され完成した。…インディクティオの8月。寄進をなした者、そしてこれから寄進せんとする者の(魂の)救済のため、そして捧げものとして。アーメン⁽⁵⁾。

この銘文の西側に配置された長方形のパネルには、破風のある神殿風の建物が表され、その屋根の両端には雄鶏が乗っている。この建物には4本の柱があり、中央の2本の間には以下の銘文が見られる。

銘文2:

汝(神)の僕ステファノスの息子セルギオス、そしてポルフィリアの息子プロコピオス、そしてローミ、そしてマリア、そして修道士ユリアノスの(魂の)救済のため、そして捧げものとして⁽⁶⁾。

その外側の柱の間には燭台があり、建物の左右には花、果樹、孔雀が対となって配されている。

以上のパネルと線で隔てられた区画にはインハビテッド・スクロールが表されており、この装飾が床モザイクの大部分を占めている。豊かなアカンサスの葉の間に表される、人物、動植物の各モチーフは実際の比率を無視し、個々のスクロールに収まるよう、大きさが統一されている。

インハビテッド・スクロールの各連に表されたモチーフは次のとおりである。最も東の連、北側には腹ばいになったライオンが配されているが、この獣はたてがみと乳房を持ち、口を開けて尖った歯を見せている。続く中央のスクロールの人物の顔や左手は失われている。調査当時の写真によれば、表されていたのはマントをはおり右手に剣、左手に盾を持った男性であった⁽⁷⁾。その隣には後足で立つ熊が配されている。第2の連では破損があるものの、銘からそれと知れる「大地」(ΓΗ)が女性の胸像として中央に置かれ、その両側には果物の入った籠を両手で捧げ持つ、裸足の若者が表されている。第3の連には北側から順に、腹ばいになった羊、投石器を

手にした若者、走る猪が表されている。第4の連では北側のモチーフが残っておらず、中央には果物籠を肩に乗せて立つ、ヴェールをかぶった女性、その隣には座る犬が配されている。この連より西側の部分は失われている。剣と盾を持つ男性とゲー、および果物を捧げる男性の一方に破損が見られるが、これは最初の調査以後に被ったものである⁽⁸⁾。スクロールの間にある小さな区画にも、モチーフが配されている。各連に2つずつ表されたモチーフは東側より、果物もしくはパンの入った籠、茎と葉のある、種類の異なる果実、向き合う魚であり、第4および第5連には草花がひとつずつ表されている。

身廊床の最も東に位置する銘文1において、再建の年は破損により読み取ることができない。ここに記された主教ヨアンニスの名は、同じネボ山の聖ロト・聖プロコピオスの聖堂における聖域近くの銘文、および聖ゲオルギオス聖堂（536年）身廊、東側のパネルの銘文にも見出だされてきた。この名の主教は少なくとも535年から562年の間に、マダバで在位していたとされる⁽⁹⁾。これらの銘文に登場する主教ヨアンニスは同じ人物と推測されているが、その理由は、共に銘文に表された名前に同じものが見られるためである。例えば銘文2に記されたセルギオス、プロコピオス、ポルフィリア、ローミ、マリアの名は聖ロト・聖プロコピオスの聖堂銘文にも表れる⁽¹⁰⁾。同一人物と目される、主教ヨアンニスの名を銘文に含むことから、これらの聖堂は年代が近いと考えられてきた。銘文2に名を記す人々は、再建にかかわった寄進者と見られ、複数の聖堂に名を残す点から、土地の有力な一族であったと想像される。

この礼拝堂のインハビテッド・スクロールに関しては、各研究者により様々な解釈が行われてきた。サレーとバガッティは、収穫や狩りを連想させる装飾は聖職者が土地の人々を思い起こす目的で選択したものであり、人々のこうした労働は神に仕える行為と強く結びついていたと述べ、装飾の内容は実際の暮らしに由来するとの考えを示した⁽¹¹⁾。

グラバールは司祭ヨアンニス礼拝堂、および同じネボ山の聖ゲオルギオス聖堂に見られるインハビテッド・スクロールが大地のイメージを表したものであると述べた。グラバールによれば、大地はすなわち神の葡萄園であり、こうした装飾は神のもとにおける大地の平和と静けさを表したものである⁽¹²⁾。

ドーフィン、両聖堂のインハビテッド・スクロールが葡萄ではなくアカンサスである点を指摘しつつもこの考えに従い、動物と戦う狩人の表現は、この園を守護する者を表すとの考えを示した⁽¹³⁾。聖ゲオルギオス聖堂の身廊床はアカンサスのスクロールを示し、司祭ヨアンニス礼拝堂と共通するモチーフを含むため、比較し語られることの多い作例である。

マグワイヤは、ネボ山の2つのインハビテッド・スクロールには、グラバールが示したような一般的な解釈に加え、さらなるキリスト教的意味があると考えた。すなわち、神に対する大地の産物の奉納、および動物に対する人間の優位である⁽¹⁴⁾。ハントは、こうした装飾は大地を賞賛するものと考えてマグワイヤを支持し、実際の生活に由来するというサレーとバガッティの意見に疑問を示した。さらにハントは、牧歌的な主題を表したヨルダンのモザイクとコンスタンティノポリス大宮殿の床モザイクとの類似を指摘した⁽¹⁵⁾。

ネボ山の床モザイクには、果実に関連するモチーフが多用されている。例を挙げるならば、湾曲したナイフを手に葡萄を収穫する男性は司祭ヨアンニス礼拝堂下部モザイク、カイアノスの聖堂下部モザイク（5世紀後半-6世紀初頭）、聖ロト・聖プロコピオスの聖堂、輔祭トマス礼拝堂（6世紀前半）に共通し見られる。聖母礼拝堂（7世紀初頭）においては、ナイフを添えた様々な果物が表されている⁽¹⁶⁾。

マグワイヤは果実のモチーフに関し、大地の産物が天地創造や創造主を想起させるとし、さらに銘文に見られる「捧げ物」という言葉との関連に注目した。マグワイヤによれば、「主の果実」「神の果実」等の言葉が刻まれた印があり、これらは供物のパンに押印されたと考えられる⁽¹⁷⁾。

果実に関し、本稿ではゲーとの関連から考察を試みる。果実は異教古代の大地の女神と結びついており、その関わりの深さはローマ時代の作例にも見ることができ。アラ・パキス・アウグスタエ（紀元前9年）正面東側の壁上段に表された、大地の女神テルスと見られる、岩に座る女性は膝の上に果物を置く。大地の女神を表した作例において、果実は穀物や花とともに女神の身を飾るか、豊穡の角、あるいは籠に入った状態で女神の傍らに置かれる、もしくは女神の持つ布に入っていることが多い。大地の女神は世俗および宗教的な建造物双方の装飾に見ら

れ、キリスト教聖堂に表されたものに関しては、大地を擬人化した表現と見なされてきた⁽¹⁸⁾。ネボ山においては司祭ヨアンニス礼拝堂、および聖ゲオルギオス聖堂にゲーが表されている。ネボ山の2つの床モザイクと時代の近い、世俗の建物にゲーが用いられた例としてはアンティオキア、「アイオーンの家」で出土した床モザイク（5世紀末-6世紀初頭、アレン記念美術館、オーバリン、オハイオ州）を挙げることができる⁽¹⁹⁾。

以下、果実の象徴性を解き明かすにあたり、「大地」との関係から、その意味を探ることとする。司祭ヨアンニス礼拝堂において、ゲーは重要な要素と思われるが、その理由はゲーが多くの関連するモチーフに囲まれているためである。最初にゲーに従属するモチーフ、および果実のモチーフを確認し、装飾の構成を把握する。

「大地」の表現の特徴として、果実が添えられる他に、四季の擬人像を伴う作例の多さが挙げられる⁽²⁰⁾。「四季」と「大地」の混在と見られる作例もあり、その存在は両者の結びつきの強さを示唆する。一方、「四季」は「大地」以外の主題と共に表される場合もある。「四季」を伴う主題に共通する要素を探ることで、「大地」が象徴してきたものは明確になるとと思われる。続く章では「四季」との関わりを手掛かりに、「大地」に読み取られてきた意味を検討する。さらに、大地と果実に関する言説に目を通し、両者に関する当時の考えを探る。この礼拝堂に表された、果実と大地が象徴するものに関し、以上の手順で考察を進めたい。

2. 装飾の構成

最初にゲーに属するモチーフ、および果実のモチーフの確認を行う。ゲーは破損を被ったが、1935年まではその完全な姿を見ることができた(図5)⁽²¹⁾。当時の写真によれば、ゲーは頭部を果物で飾り、城壁の冠を戴く女性の胸像であったことがわかる。彼女はトゥニカとパリウムをまとい、二連の首飾りをつけ、果物を入れた布の両端を手を持つ。

ゲーの冠は図式化されているが、テュケと呼ばれる都市の擬人像が戴く冠と同様のものと思われる。「アンティオキアのテュケ」として知られる、ヴァティカン美術館所蔵の彫刻がテュケの代表的な例である⁽²²⁾。マダバのヒッポリュトス・ホール（6世紀半ば）においては、四季の擬人像が同様の冠を戴い

ている⁽²³⁾。様々な美術作品に表されたゲーの姿は多様である。胸像および全身像の作例があり、ギリシャ語の銘「ΓΗ」を伴う場合も多い⁽²⁴⁾。

司祭ヨアンニス礼拝堂のゲーに属するモチーフとして、対面する形で置かれた2尾の魚について最初に触れたい。この魚は人間や動物、花や果物という、地上のものを並べた装飾の中で関心を引くモチーフとなっており、この点にキリスト教的シンボルズムを見出す研究者もいる⁽²⁵⁾。イングランド北東部、ダラムで聖カスバートの墓から発見された絹織物には、同様の魚と人物が表されている⁽²⁶⁾。これまでもその図案が、床モザイクのゲーとの類似を指摘されてきた布は損傷が激しく、現在では複数の断片が残るのみである。図案の再構成案では、果物や野菜の入った布を持つ人物が円環の中に見られる(図6)⁽²⁷⁾。その下部には水と思われる波線があり、水鳥と魚が表されている。この織物について論じたフラナガンは、中央の人物を大地の女神ゲー、もしくは四季の擬人像の発展形である自然の女神と考え、一方で水鳥と魚が意味するものは不明とした。キッツィンガーとマグワイヤはこの図案を、陸地と海の表現であると解釈した⁽²⁸⁾。

絹織物の図案とモザイクのゲーが同じものを表すならば、魚は果物が入った布を手にした人物に付属すると考えられる。魚のエピソードを持つ女神として、シリアのデア・シリアが挙げられる。デア・シリアは様々な女神の要素を備え、その像は飾りのひとつとして頭に塔を戴いていたと、2世紀の風刺詩人にして、シリアのサモサタ出身であったルキアノス（120/125-180年以後）が語っている。女神の神殿近くには池があり、そこで神聖な魚が飼われていたことを、ルキアノスは合わせて伝えている⁽²⁹⁾。塔の冠はテュケおよび司祭ヨアンニス礼拝堂のゲーの城壁冠にも通じる要素といえる。

デア・シリアは豊穡神とされており、麦を身につける、あるいは2尾の魚を頭部に示した彫刻がヨルダン南部、キルベット・タンヌール（Kirbet Tan-nur）で見つかっている⁽³⁰⁾。豊穡の女神が魚と結びつく理由は判然としておらず、神話で語られる洪水のエピソードに由来するとも、大地を豊かにするために不可欠な水の要素を表すとも考えられてきた⁽³¹⁾。黄道十二星座の魚座の神話にシリアの女神デルケトが登場することも、両者の結びつきを示すと思われる⁽³²⁾。

ネボ山のモザイクおよびダラムの絹に見られる魚は、この女神に関連したものと考えられる。すなわち司祭ヨアンニス礼拝堂におけるゲーは、土着の異教女神の姿をとっていると言えよう。絹織物の人物を囲む円環には野菜や果物が配されているが、ゲーの上方にも葉のついた果物が置かれている。

果物の入った籠を持つ男性も、ゲーと共に表されることの多いモチーフである。ネボ山にある、聖ゲオルギオス聖堂身廊床の中央列、最も東にゲーが配されている。破損により頭部および銘が失われているが、果物の入った布を手にした胸像であることから、この部分はゲーを表したものと見なされてきた。過去の写真によれば、その両側に男性が配されている。ひとりには果物が入っていると思われる籠を両手でゲーの方に差し出す。もう一方の男性は片手に何かを持っていた様子である³³⁾。

アンティオキア、「アイオーンの家」上部床モザイクでは、中央のメダイオン内にゲーの胸像が表されている³⁴⁾。果物で頭部を飾っている点が司祭ヨアンニス礼拝堂の作例と共通するが、ここではゲーは果物の入った布を持たず、首に蛇を巻く。メダイオンの両側に配された少年らは豊穡の象徴であるコロヌコピアを持つ。

以上の確認から、司祭ヨアンニス礼拝堂においてゲーを取り巻く魚、果物、および捧げ物を持つ男性たちはこの女神に付属すると考えられる。アカンサスの葉による、異なる枠の中に置かれてはいるものの、これらは従来ゲーを表す際、共に示されてきたモチーフであったと思われる。

この作例では果物に関わる表現も多用されている。ゲーの傍の2つの果物、ゲーの持つ布の中の果物、男性たちが彼女に捧げる籠の果物があり、最も西側の列では女性が肩に乗せた果物籠が確認でき、果物のイメージが身廊の床に繰り返されている。

なお、最も東側に置かれた2つの籠の中身は、果物もしくはパンと考えられてきた³⁵⁾。男性たちがゲーに差し出す籠、および女性が肩に乗せた籠の中身には葉が添えてあるが、この2つの籠にはその表現が見られない。豊穡を司る点においては、パンの材料となる穀物もゲーの扱う物であり、彼女の髪飾りには麦の穂も含まれていたとされる³⁶⁾。こうした観察から、ゲーと関連したモチーフ、およびこれと関わる可能性のあるモチーフが占める領域は広いと考えられる。

以上、インハビテッド・スクロールの構成を検討し、この礼拝堂の装飾においてゲーが関連するモチーフに囲まれ、重要な要素となっていること、およびこれと密接なつながりを持つ果物のモチーフも繰り返して表されている点を確認した。続く章において、四季の擬人像がゲーと共に表される作例に注目し、「四季」を伴う他の主題との共通点を探ることで、「大地」に含まれる意味を明らかにしたい。

3. 四季と大地

ゲーは果実を伴うという特徴に加え、四季の擬人像と共に表される場合の多いことが、これまでに指摘されてきた³⁷⁾。「大地」が象徴してきたものを探るにあたり、ここでは「四季」との結びつきに注目したい。「大地」以外の主題と共に「四季」が表される作例もあるため、これらの主題に共通する要素を探ることで、「大地」が意味してきたものを明確にできると思われる。

四季の擬人像には男女の双方があり、銘が添えられ、どの季節を示すか判別が可能な場合もある。多くの場合はゲーが中央にあり、その周囲に「四季」が置かれる。ダフネ、「ゲーと四季の家」の例ではゲー、および「秋」を除く3つの季節が見つかり、それぞれが八角形のパネル内に胸像の形で表されている。各季節はゲーを囲むように配されていた³⁸⁾。

ゲーと「四季」を表した作例の中には、ゲーを特定の季節の代わりに用いたと見られるものも存在する。イスラエル、バイト・ジブリン (Beit Jibrin) の例では春、夏、冬の擬人像とともにゲーが並ぶ。3つの季節とゲーは、かつて聖堂であった建物の床の中央、内陣と入り口を結ぶ直線上に配されている。この作例には「秋」が見当たらず、果物を入れた布を持つゲーが、「秋」の役割を果たすと解釈されてきた³⁹⁾。大地の女神と「四季」が混在した作例は、両者の形態的な近さに加え、2つの主題が強く結びついてきたことを示すと思われる。聖カスバートの墓で見つかった絹織物の図案に表された人物が、大地の女神ゲーもしくは四季の擬人像の発展形と推測されたのも、両者の親和性によるものといえよう⁴⁰⁾。

ネボ山においては、聖ゲオルギオス聖堂に「四季」が表されていると考えられてきた。前述のように、この聖堂では身廊床の大部分を占めるアカンサスの

スクロール内にゲーと、捧げ物をする2人の男性が表されている。四季の擬人像とされる胸像のパネルは、身廊を囲むメアンダー文の帯の中に配されており、冬と夏は東の内陣側に、春と秋は西側に位置する。これらが四季の擬人像であるとの解釈はサレーとバガッティによる。季節の名を表す銘を欠くものの、コルヌコピア、麦の穂、オリーブの枝といった持物から各季節の同定がなされた⁽⁴¹⁾。四季は巡る時間を表すとされ、「四季」を伴う「大地」の作例は、季節の循環がもたらす豊かな実りを表すと考えられてきた⁽⁴²⁾。

「大地」の意味を考えるにあたり、「四季」と共に表される他の主題の作例を参照し、その共通点を探ることとしたい。ディオニュソス、および十二か月の擬人像と「四季」を組み合わせた作例はよく知られているが、ここで注目したいのはアンヌス（年）およびアナネオーシス（刷新）、そしてキリストと思われる人物を「四季」が囲む床モザイクである。

北アフリカで出土した例（2-3世紀、エル・ジェム博物館、チュニジア、図7）において、中央のメダイオンに表された若い男性は年の擬人像アンヌス、もしくは永遠を表すアイオンと考えられてきた。各季節は胸像の形で、蔓草の中に配されている。アンヌスは年の循環を司る者として、「四季」の中央を占めると思われるが、果物や麦の穂、花から成る冠を戴くことから、季節の運行がもたらす豊かさも示唆する可能性を持つ。アンヌスの表現には2種類あり、大きな円環として表された黄道帯を持つ場合と、エル・ジェムの例のように花や果物を伴う場合がある。2つの表現は、アンヌスのこの2つの特徴を示すと思われる⁽⁴³⁾。

ダフネの作例では様々な果物を配したリースの内部に、ギリシャ語のアナネオーシス、すなわち「刷新」の銘を添えた女性の半身が表されている。リースの中に示された、翼のある小さな4つの人物像が「四季」と見なされてきた。（5世紀、ハタイ考古学博物館、トルコ、図8）。このアナネオーシスは永遠を意味するアイオンと関連付けられ、再生もしくは四季の循環がもたらす豊穡を示すと考えられてきた⁽⁴⁴⁾。

イングランド南部、ヒントン・セント・メリーで出土した床モザイクは、四隅に四季の擬人像と思われる胸像を配し、中央のメダイオンにはXPのモノグラムをニブスとしたキリストを置く（4世紀、

大英博物館、図9）。この床が属していた建物は、宗教的な建造物ではなかったと考えられている。メダイオンの人物の左右には、不死の象徴とされる柘榴が配されている。この作例は実りや不死、救済を表すとされ、中央のキリストを四季を動かす要因と見なす、アンヌスに通じる解釈もなされてきた⁽⁴⁵⁾。

これら3つの、四季を伴う作例の共通点として、中央の主題が再び巡りくるものを表していることが挙げられる。アンヌス、すなわち「年」は永遠に巡るものであり、アナネオーシスすなわち「刷新」は新たな始まりであり、キリストは死から復活を遂げるエピソードの持ち主である。当然ながら四季も循環するものであり、中央の主題とその周囲に置かれた「四季」は、同様の意味を重ねていると考えられる。巡るもの、すなわち繰り返しが表現されていることから発展し、この三者に永遠もしくは再生、不死の意味合いが読み取られてきたことも共通する。これら主題を囲む「四季」も、循環に加え、永遠や再生を意味すると推測される。

「四季」はローマのメダイオンにも用いられてきた。この主題と共に示された銘には、豊穡を示す言葉に交じり、永遠を意味すると思われるものも見られる。「AETERNITAS AVG」の銘を持つタキトゥス帝（275-276年）のメダイオンにおいて、中央の皇帝は黄道帯を持つアンヌスの作例に見るような円環を持ち、その傍らに「四季」が小さく表されている⁽⁴⁶⁾。四季も永遠の意味合いに関係することが、こうした例にも示されているといえる。中央に表された主題とそれを囲む「四季」とは、永遠、循環、もしくは再生の意味を重ねる可能性を持つ。

次章において、これらの作例に象徴される永遠や再生を、同様に「四季」を伴う場合の多い「大地」にも読み取ることができるか検討したい。中央の主題と、それを囲む「四季」とが同様の意味を重ねたものであるなら、「四季」を持たないヨアンニス礼拝堂の「大地」にも再生の意味合いが見いだせるのではないか。

4. 果実と大地

「四季」を伴う主題について、巡るものという共通点があることは、先に示したとおりである。大地それ自体に対し「巡る」という表現は適切と思われないが、これと関連を持ち、循環の動きを示して再生や永遠を想起させる要素を探るにあたり、「大地」

と共に表されることが多く、アンヌスやキリストの例にも示されてきた果物に注目すべきであろう。前述のように、アンヌスは様々な果物や花から成る冠を戴き、季節の豊かさを暗示する。またキリストの左右に置かれた柘榴は不死を象徴するとされる。

「大地」と「四季」の組み合わせにより、季節の到来による実りが表されてきた。マグワイヤは、司祭ヨアンニス礼拝堂および聖ゲオルギオス聖堂の装飾に関し、次のような循環を見出した。すなわち収穫された最初の果実を感謝の証、および豊穡の願いとして神に捧げ、願いが通じれば、季節が巡ったのちに再び豊穡がもたらされる⁽⁴⁷⁾。豊かな実りへの願いと結びついた、果物にまつわるこのような繰り返しも考えられるが、アレクサンドリアのフィロンは、それとは異なる循環に触れている。フィロンは1世紀に活躍したユダヤの思想家であるが、後世の教父らの著作にもその影響を見ることができる⁽⁴⁸⁾。旧約聖書、創世記に関する彼の著作に、次のような一節が見られる。

…すると大地は、あたかも長い間はらんで陣痛に苦しんでいたかのように、すべての種類の蒔かれたもの、ことごとくの木、さらに無数の種類の果実を生んだのである。

だが果実は、ただ動物の餌であるばかりでなく、同種のもの絶えざる生成の備えでもある。つまり、果実は種子としてのあり方を内包しており、その中に木全体のロゴスがあって、初めはまだ隠れて見えない状態にあるが、やがて季節が巡って来ると現れ出て見えるようになるのである。それは、神が、自然に往復反転の過程をとらせ、種を不滅なものにし、永遠に与らせようとしたからである。そのために、神は、「初め」を導いて「終わり」へと至らせもすれば、また、「終わり」を「初め」に戻るようにもしたのである。じっさい、樹木から果実が生じるが、それがいわば「初め」から「終わり」に至る例に当たり、また、自らのうちに種子を含んでいる果実から今度は樹木が生じるが、これがいわば「終わり」から「初め」に至る例に相当するといつてよいであろう⁽⁴⁹⁾。

天地創造の三日目、神は大地に命じ草や木を芽生えさせるが、上記の引用はその部分に関する解釈を

述べたものである。種子を持った果実は初めを内包した終わりの姿であり、樹木を生じて終わりから初めへと転じることが語られる。フィロンは、その往復反転には季節の循環が影響する点にも触れ、さらに惑星が大気に働きかけて季節ごとの変化を引き起こし、地上のすべてのものを完成に導くと述べた⁽⁵⁰⁾。

大地とそれに働きかける四季、そしてその結果生み出される動植物という、フィロンの語る世界観は、大地と四季、そして動植物を表した床モザイクの作例を想起させる。その一例としてチュニジア、カルタゴの床モザイクを挙げることができよう(図10)⁽⁵¹⁾。この作例の構成を描きとめた記録によれば、中央のメダイオンには椅子のようなものに座り、コルヌコピアを左腕に抱えた人物が置かれている。この人物は大地もしくは豊穡の女神と解釈されてきた。その傍らには、この人物の方に片腕を伸ばす別の人物が表され、両者の周りには草花が見られる。その周囲には十二か月の擬人像が並び、それぞれの月を表す銘が添えられている。以上の部分が果物と葉からなるリースに囲まれ、さらにそれを囲む方形の四隅に四季の擬人像が銘と共に配され、その間を鳥と植物が満たしている。このモザイクの外側の部分は幅の広い帯状であり、中に草木と四つ足の獣を表す。大地や四季、動植物といった様々な作例に見られる要素が、このカルタゴの例において集約されている。

フィロンが述べたのは大地を介し、果実に顕著に示される、自然における生と死の循環であった。一方、2世紀にアンティオキアの主教であったテオフィロス(181/188年歿)は、死者が生き返る証に関し、次のように語っている。

しかしながら、神はこのことを信じるための証拠をあなたにたくさん見せているのである。というのも、もしよければ、季節や昼や夜の終わりを、すなわちそれらがどのようにして死に、そして復活するかということを考えてみなさい。また植物の種や実の復活、しかも人間の利益のために起こる復活というものもそうではないか。たとえば、麦粒や他の種粒を大地に蒔くと、まず死んで消えてしまうが、次には生き返って穂となるということが挙げられよう。また木や果物は神の命令により、人間にはそれとわからず、目に見えないものから季節に応じた

実をつけるという本性をもっているではないか。〔中略〕これらすべてのことは神の知恵の働きであり、それは、まさにこれらのことを通して神がすべての人間を一人残らず復活させることができるということを示すためなのである⁵²。

テオフィロスによれば、季節や昼、夜といった循環するものは死と復活を繰り返しており、それと同じように植物の種や実が大地に埋められたのちに復活する。さらに、このことはすべての人間が復活する証として神が我々に示すものであると、テオフィロスは続ける。すなわち、穀物や果実は人間のために実を結ぶだけでなく、再生、復活の証拠を人間に示すためにも存在するのである。

果実と種子に関しては、異なる見方も示されている。例えばオリゲネス（185頃-253/254年）は、天地創造の三日目における植物の芽生えに関し、次のように述べた。

神は、ただ青草を芽生えさせるよう地に命じただけでなく、絶えず実を結びうるように、種子をも芽生えさせるよう命じる。また、ただ果樹（を芽生えさせるよう）命じるだけでなく、「種類に応じて果実を結ぶ種子をもたらす果実」を結ぶよう命じる。それは、果実が自らの内にもつ種子からたえず果実をもたらしうるためである。

それゆえ、同様に、われわれも実を結び、われわれ自身の内に種子を有していなければならない。すなわち、あらゆる善行と美德の種子をわれわれの心の内に有していなければならない⁵³。

ここでは、義に即した行為が果実に、その出発点となる善行と美德の精神が種子に例えられている。大地と果実を用いた聖堂の装飾に、こうした道徳的な比喩を読み取ることも可能である。しかし、床モザイクにおいて、「大地」が循環するものである「四季」を伴うことが多く、「四季」と組み合わせられる他の主題として、年の擬人像アヌスや刷新を意味するアナネオーシスなどの例があることから、再生、復活の意味合いを読む方がよりふさわしいと思われる。

4世紀、コンスタンティノポリス総主教であったヨアンニス・クリソストモス（344/349-407年）は、「ローマ人への手紙」の一節に関する説教において、次のように語っている。

…「もし、我々が共に植えられたなら」、したがって、植えることの言及が、そこから生じて我々にもたらされる果実の手がかりを与える。なぜならあの方の体は地に埋められ、その果実として世界の救済をもたらすからだ⁵⁴。

新約聖書のこの部分は、キリストの死および信者にとっての「水における死」たる洗礼について触れた箇所であるが、それを背景に語られるのは種子のごとく埋められたキリストと、その成果としてもたらされる救済である。ここには埋葬と植えることを近いものにとらえる感覚が窺える。

オリゲネスを除く以上の言説は、地に蒔かれた種子が成長して樹木となり、やがて実を結び、その実に内包された種子が地に落ちて再び発芽するという、自然をつぶさに観察することで感知されてきたサイクルに、再生の象徴を見出したものである。四季は、この循環に働きかける役割を担っている。大地を介した果実の循環は、永遠や再生、復活を想起させるものであり、そのことが司祭ヨアンニス礼拝堂で示される、果実と大地の装飾にも反映されていると考えられる。

先に述べたように、この礼拝堂には2つの銘文が残るが、どちらも装飾の意図を説明したものではなく、一方には寄進者たちと思われる名が連ねられている。また身廊全体を囲む装飾帯に見られる2つの胸像は寄進者の肖像とされている⁵⁵。東側、中央の女性にはニンブスが表されているが、聖人とはみなされておらず、銘文に名を残す寄進者、もしくは寄進者らの母と考えられてきた⁵⁶。司祭ヨアンニス礼拝堂の装飾は、銘文および肖像の形で存在を示すこれらの人々、おそらくは土地の有力な一族が、豊穡および再生の願いを込めたものと思われる。

おわりに

本稿ではゲーを中心とし、果実のモチーフを繰り返した司祭ヨアンニス礼拝堂上部の床モザイクに、再生への願いが込められた可能性を検討した。大地を表すゲーは重要な要素であり、果実はこれと

強いつながりを有する。「大地」は四季の擬人像と組み合わせられる作例が多いが、「四季」を伴う他の主題に再生や永遠、復活を想起させるものが見られることから、「大地」も同様の意味を持ちうると推測した。この礼拝堂において「四季」は表されないものの、「四季」とそれが囲む中央の主題に関しては循環の意味合い、アレクサンドリアのフィロンの言葉を借りるならば往復反転の要素が共通しており、両者は同様の内容を重ねたものと考えられる。

果実と大地に関する言説の中に、再生や復活に言及したものがあることが、この考えの裏付となる。種子を含んだ果物が地に落ち、季節の移り変わりによって樹木となり、再び実をつける循環に、再生の証が見出されてきたといえる。大地を介した、こうした循環は豊かな実りをもたらす。この循環は生と死の繰り返しとも見なされ、そこに死からの復活という願いが重ねられたと考えられる。自然の科学的な観察、もしくは農耕といった日々の営みにおいて感知されてきた周期に、豊穡と再生への望みが託されてきたといえよう。

今日のヨルダンにあたる地域のモザイク制作は、6世紀に頂点を迎えたとされる。魚や鳥、獣や花々といった古典古代以来のモチーフが採用され、また本稿で取り上げたように、擬人像も聖堂の装飾に組み入れられてきた。古来より果実と大地に読み取られてきた再生の意味合いは、引き続きこの床モザイクにも反映されていると考えられる。

ハンフマンによれば、墓碑銘には次のようなものがあるという。「果実を大地に与えよ、大地が果実を返せるように」⁶⁷⁾。この銘文で語られる、大地を介し、果実が種子から再び果実となる循環にそれ以上の意味、すなわち人間の死と再生の意味が託されているか、判断は困難であるが、大地の再生する力に対する意識を読み取ることはできる。

ネボ山の他の床モザイクにおいて、果実を題材とした装飾は多く用いられているが、他の作例にも再生や永遠の意味合いが見出せるか、確認が必要である。司祭ヨアンニス礼拝堂の装飾に関しては、人と動物に関する部分の考察が課題といえる。こうした検討は、他の作例にも敷衍される可能性を持つだろう。

「四季」を伴う表現に関しては、永遠、再生を象徴するとの見解を示したが、この考えが他の作例にも適用できるか確認を要する。以上を今後の課題と

したい。

註

- (1) エゲリア『エゲリア巡礼記』太田強正訳、サンパウロ、2002年、34-41頁(10-12)。
- (2) Rufus, John, *The Lives of Peter the Iberian, Theodosius of Jerusalem, and the Monk Romanus*, transl. by Horn, Cornelia B.; Phenix Jr., Robert R., Atlanta, 2008, p. 179.
- (3) Saller, Sylvester J.; Bagatti, Bellarmino, *The Town of Nebo (Khirbet el-Mekhayyat): with a brief survey of other ancient Christian Monuments in Transjordan*, Jerusalem, 1949 (1982), pp. 1-8, pp. 207-217; Piccirillo, Michele, *The Mosaics of Jordan*, Amman, c1992, p. 164; Idem, "The Churches on Mount Nebo. New Discoveries [以下 Churches と略記]," eds. by Piccirillo, Michele; Alliata, Eugenio, *Mount Nebo: New Archaeological Excavations 1967-1997*, Jerusalem, 1998, pp. 222-225.
- (4) Di Segni, Leab, "The Greek Inscriptions," eds. by Piccirillo, Michele; Alliata, Eugenio, *Mount Nebo: New Archaeological Excavations 1967-1997*, Jerusalem, 1998, pp. 457-458.
- (5) 筆者による試訳。Ἐπὶ τοῦ ὀστω(τάτου) κ(αὶ) θεοφίλου (τατου) ἐπισκόπου Ἰωάννου ἀν [ενεώθη κ(αὶ) ἐ] τ [ε] λιώθη ὡ ἄγ(ιος) τόπος σπ(ου)δῆ Ἰωάννου πρ(ε)σβ(υτέρου) ἐτελιώθη μνηὶ Αὐγούστου ἰν [δ(ικτιῶνος ...ὺ) πὲρ σωτηρίας κ(αὶ) προσφορᾶς τῶν προσενεγκόντων κ(αὶ) μελλόντων προσενεγκ [ε] ἰν. Ἀμήν.
Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 172-176; Di Segni, *op. cit.*, p. 447.
- (6) 筆者による試訳。Ἵπὲρ σωτηρίας κ(αὶ) προσφορᾶς τῶν δούλων σου Σεργίου Στεφάνου κ(αὶ) Προκοπίου Πορφυρίας κ(αὶ) Ῥώμης κ(αὶ) Μαρίας κ(αὶ) Ἰουλιανοῦ μοναχοῦ.
Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 176-177; Di Segni, *op. cit.*, pp. 447-448.
- (7) Saller and Bagatti, *op. cit.*, pl. 9-2.
- (8) Piccirillo, "Churches," p. 224.
- (9) Di Segni, *op. cit.*, pp. 442-445. ネボ山以外の例として、マダバの大聖堂に付属する聖テオドロス礼拝堂、および聖使徒聖堂の北に付属する礼拝堂の銘文にも主教ヨアンニスの名が記されている。Saller, Sylvester J., "The Works of Bishop John of Madaba in the light of Recent Discoveries," *Liber Annuus*, vol. 19 (1969), pp. 145-167.
- (10) Saller and Bagatti, *op. cit.*, p. 150, pp. 184-193. 身廊東端の銘文には「…聖なる殉教者の神よ、セルギオスとその息子プロコピオスの贈り物を受け取りたまえ…」との一文があり、南側廊東端のパネルには「聖ロトよ、その僕たるローミ、ポルフィリアとマリアの願いを受け入れたまえ」と記されている。
- (11) Saller and Bagatti, *op. cit.*, p. 92ff.
- (12) Grabar, André, "Recherches sur les sources juives de l'art paléochrétien," *Cahiers Archéologiques*, vol. 12 (1962), Paris, pp. 119-122. Idem, *Christian Iconography: A Study of Its Origins*, Princeton, 1968 (1980), pp. 53-54.
- (13) Dauphin, Claudine, "Symbolic or Decorative? The Inhabited Scroll as a Means of Studying Some Early Byzantine Mentalities," *Byzantion*, vol. 48 (1978), pp. 12-14.

- (14) Maguire, Henry, *Earth and Ocean: The Terrestrial World in Early Byzantine Art*, University Park, Pennsylvania, 1987, pp. 69-72.
- (15) Hunt, Lucy-Anne, "The Byzantine Mosaics of Jordan in Context: Remarks on Imagery, Donors and Mosaicists," *Palestine Exploration Quarterly*, vol. 126 (1994), pp. 111-119.
- (16) Piccirillo, Michele, "The Mosaics [以下 Mosaics と略記]," eds. by Piccirillo, Michele; Alliata, Eugenio, *Mount Nebo: New Archaeological Excavations 1967-1997*, Jerusalem, 1998, p. 303(pl. 78-80).
- (17) Maguire, 1987, pp. 49-50, pp. 71-72.
- (18) 例えばサレーとバガッティは、神の被造物である大地は神を讃える詩編と関連するものであり、聖堂においては地にあたる身廊に適した装飾であったと考えている。Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 178-180.
- (19) Levi, Doro, *Antioch Mosaic Pavements*, vol.1, Princeton/London/Hague, 1947, p. 356. アレン記念美術館ウェブサイト コレクションページ <http://allenartcollection.oberlin.edu/> (Mosaic of the Earth Goddess Ge) (最終閲覧日: 2014年7月31日)
- (20) Parrish, David, *Season Mosaics of Roman North Africa*, Roma, 1984, pp. 50-51.
- (21) 1935年から1973年の間に破損したと考えられる。Piccirillo, "Mosaics," p. 371, n. 79.
- (22) Ed. by Matheson, Susan B., *An Obsession with Fortune: Tyche in Greek and Roman art*, exh. cat., New Haven, 1994, p. 12(fig. 1).
- (23) e. g. El-Hassan, HRH Princess Sumaya; Piccirillo, Michele, *The Mosaics of Jordan: Roman, Byzantine, Islamic; a loan exhibition*, exh. cat., London, 1993, p. 51.
- (24) 例えばダフネの「ウースター・ハンティングの家」や「ゲーと四季の家」などで、ゲーを表したモザイクが複数出土している。ヨルダンにおいてはペトラの聖堂や主教セルギオスの聖堂(ウム・アル=ラサス)の例がある。Hachlili, Rachel, *Ancient Mosaic Pavements: Themes, Issues, and Trends: Selected Studies*, Leiden/Boston, 2009, pp. 179-180. 布に関しては、エジプトのアンティノエで出土したコプト織の布(エルミタージュ美術館所蔵)が挙げられる。マグワイヤは次の論文において、大地を表したと考えられる女性の胸像を、布の作例を中心に示している。Maguire, Henry, "The Mantle of Earth," *Rhetoric, Nature and Magic in Byzantine Art*, Aldershot, 1998, pp. 221-228, fig. 1-10. 銀器やペンダントにも、果物の入った布を手にする女性の胸像を用いた作例が見られる。Dodd, Erica Cruikshank, *Byzantine Silver Stamps*, Washington, 1961, pp. 106-107; Kondoleon, Christine, "A Gold Pendant in the Virginia Museum of Fine Arts," *Dumbarton Oaks Papers*, vol. 41 (1987), Cambridge, Massachusetts, pp. 307-316.
- (25) 辻佐保子『古典世界からキリスト教世界へ—舗床モザイクをめぐる試論—』岩波書店、1982年、212頁。
- (26) この絹は8-9世紀の作と考えられている。聖カスバートが埋葬されたのは688年であるが、その後の移葬の過程でこの布が追加されたと思われる。Granger-Taylor, Hero, "The Earth and Ocean Silk from the Tomb of St Cuthbert at Durham; Further Details," *Textile History*, vol. 20, no. 2 (1989), pp. 151-166; Muthesius, Anna, *Studies in Silk in Byzantium*, London, 2004, pp. 262-265.
- (27) 再構成案はレインによる。Raine, James, *Saint Cuthbert*, Durham, 1828, pl. V. 図案をリポートさせた再構成案は註28、フラナガンによる1956年の論文 fig. 1を参照。
- (28) Flanagan, J. F., "The Nature Goddess Silk at Durham," *The Burlington Magazine*, vol. 88, no. 523 (1946), pp. 241-247; Idem, "The Figured-Silks," *The Relics of Saint Cuthbert: Studies by Various Authors*, ed. by Battiscombe C. F., Oxford, 1956, p. 512; Kitzinger, Ernst, "Studies on Late Antique and Early Byzantine Floor Mosaics I. Mosaics at Nikopolis," *Dumbarton Oaks Papers*, vol. 6 (1951), p. 104, n. 93; Maguire, 1998, p. 223; Granger-Taylor, *op. cit.*, pp. 157-160
- (29) 女神デルケトは魚の形をしていたとも伝えられる。デルケトはセミラミス、アタルガティスなどと並ぶ、シリアの女神の名のひとつである。ルキアノス「シリアの女神について」『ルキアノス選集』内田次信訳、国文社、1999年、179-180頁、192-196頁。
- (30) *Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*, vol. 3 (1986), p. 357 (DEA SYRIA, no.25); Ed. by Markoe, Glenn, *Petra Rediscovered: the Lost City of the Nabataeans*, New York, 2003, pp. 182-183(fig. 191, 192).
- (31) Glueck, Nelson, *Deities and Dolphins: The Story of the Nabataeans*, London, 1965, pp. 315-319; Benko, Stephen, *The Virgin Goddess: Studies in the Pagan and Christian Roots of Mariology*, Leiden; Boston, 2004, pp. 53-64.
- (32) Manilius, *Astronomica*, transl. by Goold, G. P., London, 1977, pp. 84-85(3:22). Ératosthène de Cyrène, *Catastèrismes*, transl. by Zucker, Arnaud, Paris, 2013, pp. 112-113(Ch. 38).
- (33) Saller and Bagatti, *op. cit.*, pl. 22-3, 25-2; Piccirillo, "Mosaics," pp. 324-325.
- (34) 註19参照。
- (35) バガッティは籠の中身をパンとし、ピッチリッロは果物としている。Saller and Bagatti, *op. cit.*, p. 53; Piccirillo, "Mosaics," p. 353.
- (36) Saller and Bagatti, *op. cit.*, p. 51.
- (37) Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 100-101; Parrish, *op. cit.*, pp. 50-51; Merrony, Mark W., "The Reconciliation of Paganism and Christianity in the Early Byzantine Mosaic Pavements of Arabia and Palestine," *Liber Annuus*, vol. 48 (1998), pp. 450-451.
- (38) Levi, *op. cit.*, pp. 346-347; Eds. by Elderkin, George Wicker; Stillwell, Richard, *Antioch-on-the-Orontes*, vol. 2, 1934, pp. 193-194. アパメアでも「四季」がゲーを囲むモザイクが見つかっている。Balty, Janine, "Mosaïque de Gê et des Saisons à Apamée," *Syria*, vol. 50 (1973), Paris, pp. 311-347.
- (39) Hachlili, *op. cit.*, p. 179, pp. 185-186, p. 191. 「夏」は顔が破壊されており、「冬」は中央の部分を中心、狩りの様子を表した幅の広い帯の中に位置する。内陣近くの幾何学模様が表示されたパネルに、かつて「秋」が表示されていた可能性は残る。
- (40) Flanagan, 1946, p. 241; Idem, 1956, p. 508.
- (41) Saller and Bagatti, *op. cit.*, p. 72, pp. 101-102; Piccirillo, "Mosaics," pp. 323-325; Hachlili, *op. cit.*, p. 188.
- (42) Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 101-102; Balty, *op. cit.*, pp. 346-347; Merrony, *op. cit.*, pp. 450-451; Hachlili, *op. cit.*, p. 180, p. 191.

- (43) Hanfmann, George Maxim Anossov, *The Season Sarcophagus in Dumbarton Oaks*, vol. 1, Cambridge, Massachusetts, 1951 (1971), pp. 176-177, pp.251-252; Dunbabin, Katherine M. D., *The Mosaics of Roman North Africa : Studies in Iconography and Patronage*, Oxford, 1978, pp. 158-160; Parrish, *op. cit.*, pp. 147-149. 黄道帯を持つアンヌスの作例としては、北アフリカ、ハイドラ (3世紀末-4世紀初頭) やアルル (3世紀頃) のモザイクが挙げられる。この2つの作例も四季の擬人像に囲まれている。*Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*, vol. 1 (1981), pp. 799-800 (ANNUS, no. 5, 8).
- (44) Lassus, Jean, “La Mosaïque du Phénix provenant des fouilles d'Antioche,” *Monuments Piot*, vol. 36 (1938), Paris, pp. 112-116; Downey, Glanville, “Personifications of Abstract Ideas in the Antioch Mosaics,” *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, vol. 69 (1938), Boston, pp. 361-362; Levi, *op. cit.*, pp. 255-256; Hanfmann, *op. cit.*, pp. 169-170; Leader-Newby, Luth, “Personifications and Paideia in Late Antique Mosaics from the Greek East,” *Personification in the Greek World: From Antiquity to Byzantium*, eds. by Stafford, Emma; Herrin, Judith, Aldershot, 2005, pp. 234-235. レヴィは各季節の同定も試みている。それによれば頭巾を被るのが冬、その対極にあり花輪を伴うのが夏であるが、他の2つは区別が難しい。Levi, *op. cit.*, pp.320-321.
- (45) 中央の人物に関してはローマ皇帝、四隅に置かれた人物像は四方の風、もしくは福音記者との説もある。さらに、ベレロフォンのキマイラ退治を表したモザイクがこのパネルと併置されている点についても議論がある。Dunbabin, Katherine M. D., *Mosaics of the Greek and Roman World*, Cambridge, 1999 (2006), pp. 95-96; Pearce, Susan, “The Hinton St Mary Mosaic Pavement: Christ or Emperor?,” *Britannia*, vol. 39 (2008), London, pp. 193-218; 辻、前掲書、100頁、106-107頁。
- (46) 四季を伴うコインやメダイオンには、他に「FECUNDITAS」や「TEMPORUM FELICITAS」等の銘が用いられている。Hanfmann, *op. cit.*, pp. 169-170. タキトゥス帝のメダイオンに関しては以下を参照。Toynbee, Jocelyn, M., *Roman Medallions*, ser. Numismatic Studies no. 5, New York, 1944 (1986), p. 91, pp. 150-151, pl. XLVII-3.
- (47) Maguire, 1987, pp. 70-71.
- (48) フィロンの引用はエウセビオス、ヒエロニムス、オリゲネス、アンブロシウス、アウグスティヌス等にも見ることができる。Runia, David D., *Philo and the Church Fathers: A Collection of Papers*, Leiden/ New York/ Köln, 1995, pp. 228-249.
- (49) アレクサンドリアのフィロン『世界の創造』野町啓、田子多津子訳、教文館、2007年、22-23頁 (43-44)。113節にも同様の記述がみられる。バシリオスも創世記、三日目の註解において樹のロゴスに触れている。Saint Basil, *Exegetic Homilies*, ser. Fathers of the Church, vol. 46, trans. by Way, Agnes Clare, Washington D. C., c1963 (1981), p. 117 (Homily 8, on the Hexaemeron).
- (50) アレクサンドリアのフィロン、前掲書、25頁 (52節)、28頁 (59節)、46-47頁 (113節)。大地についての記述は51頁 (133節)。農耕について述べた10世紀の書『ゲオポニカ』では、風が植物のみならず、すべてのものに働きかけると語られる。Harrison, Jane Ellen, *Prolegomena to the Study of Greek Religion*, Cambridge, 1903, p. 180; *Geoponika: Farm Work : A Modern Translation of the Roman and Byzantine Farming Handbook*, trans. by Dalby, Andrew, Totnes, Devon, 2011, p. 185(9:3).
- (51) この作例は1889年に発見され、その制作年代は4世紀末から5世紀初頭と考えられている。パリの万国博で展示された後、紛失した。大きさは10.38×9.05mとされ、属していた建物の用途は不明である。記録はRené Cagnatによる。Parrish, *op. cit.*, pp. 116-120; 辻、前掲書、102-103頁。アッケルシュトレーム＝ハウゲンは、片腕を伸ばす人物を河神と推測した。Åkerström-Hougen, Gunilla, *The Calendar and Hunting Mosaics of the Villa of the Falconer in Argos: a Study in Early Byzantine Iconography*, Stockholm, 1974, pp. 124-125.
- (52) アンティオケイアのテオフィロス「アウトリュコスに送る」今井知正訳、『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』上智大学中世思想研究所、1995年、115頁 (第1巻13章)。
- (53) オリゲネス「創世記講話」小高毅訳、『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』上智大学中世思想研究所、1995年、508頁 (第1講話4)。
- (54) 説教11 (ロマ6:5)、筆者による試訳。Ed. by Schaff, Philip, *St. Chrysostom: Homilies on the Acts of the Apostles and the Epistle to the Romans*, ser. A Select library of the Nicene and post-Nicene Fathers of the Christian Church, vol. 11, Grand Rapids, Michigan, 1956, p. 408.
- (55) Saller and Bagatti, *op. cit.*, pp. 54-55, p. 99; Piccirillo, “Mosaics,” p. 351; Hunt, *op. cit.*, pp. 119-120; Hachlili, *op. cit.*, p. 239. 男性の胸像に関し、バガッティおよびピッチリッロは司祭ヨアンニスの肖像と考えている。女性の胸像は建物の下になっており、当初の調査では発見されなかった。Piccirillo, “Churches,” p. 224.
- (56) 聖人でなくともニンプスが表される作例として、通称「カルタゴの貴婦人」として知られるカルタゴ博物館所蔵の女性像が挙げられる。擬人像もしくは実在した人物の肖像双方の可能性を持つ作例である。Lavagne, Henri; de Balanda, Elisabeth; Echeverría, Armando Uribe, *Mosaïque: Trésor de la Latinité: des Origines à nos Jours*, n. p., 2000, fig. 50, p. 209. イェルサレムのオルフェウスを表した床モザイクに接して配置された、ニンプスのある2人の女性像も擬人像もしくは寄進者と考えられている。Ovadiah, Asher; Mucznik, Sonia, “Orpheus from Jerusalem—Pagan or Christian Image?,” *The Jerusalem Cathedral*, vol.1 (1981), Jerusalem, pp.158-162; Hachlili, *op. cit.*, p. 238, pl. XI. 3b.
- (57) Hanfmann, *op. cit.*, p. 235. 他にも、墓から生え出る花に関する銘文が紹介されている。

図版出典

- 図1～5 : Franciscan Archaeological Institute ウェブサイト
<http://www.christusrex.org/www1/ofm/> (最終閲覧日 : 2014年7月31日)
- 図6 : Raine, James, *Saint Cuthbert*, Durham, 1828
- 図7 : 早稲田大学文学学術院 益田朋幸教授撮影
- 図8 : プリンストン大学 (Antioch Expedition Archives, Department of Art and Archaeology, Princeton University)
- 図9 : 大英博物館

図 10 : Parrish, David, *Season Mosaics of Roman North Africa*,
Roma, 1984

図版

図 1 平面図

<http://www.christusrex.org/www1/ofm/fai/FAImukh2.html>

図 2 上部モザイク

<http://www.christusrex.org/www1/ofm/fai/FaiMukhPicts/PriestJohnA15.jpg>

図 3 東側 女性の胸像

<http://www.christusrex.org/www1/ofm/fai/FaiMukhPicts/PriestJohnA02.jpg>

図 4 北側 男性の胸像

<http://www.christusrex.org/www1/ofm/fai/FaiMukhPicts/PriestJohnA01.jpg>

図 5 ゲー

<http://www.christusrex.org/www1/ofm/fai/FaiMukhPicts/PriestJohnA11.jpg>

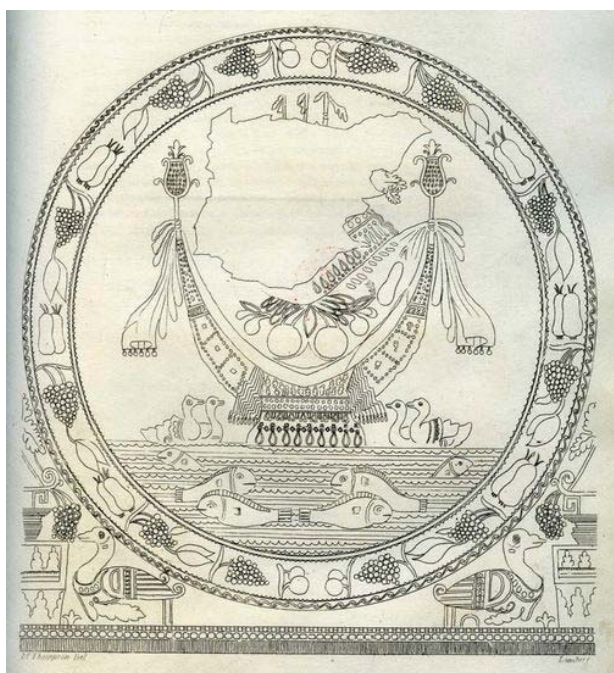


図 6 絹織物の再構成案



図 7 アンヌス (年)



図 8 アナネオーシス (刷新)



©Trustees of the British Museum

図9 ヒントン・セント・メリーのキリスト



図10 カルタゴの床モザイク